



凌辱レオタード

～淫獄に堕ちた女子高生～

斐芝嘉和

挿絵／クマトラ

立ち読み版



Contents

目次

第一章	絢の秘密	4
第二章	恥辱撮影	14
第三章	妖しい薬	42
第四章	身代わりの縄	80
第五章	恥辱の輪舞	133
第六章	墮ちゆく日々	183
第七章	淫墮の果てに……	236

登場人物

Characters

喜嶋 美沙

(きじま みさ)

比良坂学園の女子新体操部主将。
さっぱりした性格で、責任感が強く、
部員からの信頼は厚い。

平岡 絢

(ひらおか あや)

新体操部に所属する美沙の後輩。
清楚で愛らしい顔立ちの美少女。美
沙を慕っている。

難波

(なんば)

絢の父親の借金を取り立てる卑劣な
ヤクザ。

田所

(たどころ)

県下有数の資産家の老人。



粘つくような男の声と、必死にこらえている様子の絢の吐息。

（や……やめてっ！ 絢に……私の後輩に、いやらしいことししないでッ！）

胸中に叫ぶ美紗の股間が、じゅくん、と熱を帯びて潤む。

身体の中でもっとも恥ずかしい割れ目の奥、鶏冠のように紅く襲打つ二枚の肉膜が、敏感なことは知っている。肉畝の縁、紅くブクツと膨れた小さな肉豆がさらに感じ易いことも、己自身が弄った記憶でよく知っている。

指先でソツと撫でたときの、甘やかな痺れ。

温かなシャワーを当てたときの、身体の芯が蕩けていくような恍惚感。

あんなに感じ易い場所を、絢は他人の指に弄られているのだ。鼻息を荒らげた男たちに抓まれたりしごかれたり、撫でまくられたりして、

「う、あ……ンあああ……くう、くうン……う、ンうう……」

仔犬のような鳴き声をこぼしているのだ。

——— いったい、どんな気分なのだろう？

いや、恥ずかしいことは分かっている。

きつと死にたいほど恥ずかしいに決まっている。

けれど、しかし———。

「ああ、ああ……ああ、あ、ああああああ……」

次第に蕩けていく、声。

だんだん弱まっていく、抵抗の気配。

どこをどんな風に弄られたら、あんなにいやらしい声が出るのだろうか？ 私も同じようなことをされたら、絢と同じように恥ずかしい声で鳴いてしまうのだろうか？

淫らな好奇心が膨れあがり、恐る恐る臉を開く美紗。

紅く染まった顔は背けたまま、そろそろと視線だけを向け――。

「……ッ!! む、むう……ッ!」

うっとりとした蕩けた後輩の表情に気づき、思わず息を呑む。

湯上がりのように上気した頬、心地よさそうに細められた瞳、赤みを増してぼつたりとした唇、男の胸に抱き留められたまま斜めに振れ、完全に弛緩しきった細い身体。

「や、あ……あああ……見ないで、先輩……み、見ない、でえ……ッ!」

美紗の視線に気づいた美少女が、ただでさえ紅い顔をよりいっそう赤らめて、イヤするように首を振った。肩の辺りで切り揃えられた黒髪が軽やかに躍り、涙に濡れた頬に幾筋かが貼りついて、妖しい模様を描く。

だが、絢がどんなに羞じらついても、男たちに群がられた細い身体は泳ぐように

くねり、ときおり鋭く痙攣して、秘裂に産みつけられている快感の強さを克明に語っている。頬はますます赤らみ、瞳は次第に焦点を失って、

「いやあ、いやあ……は、恥ずかしい……ッ！」

掠れた悲鳴にも艶めかしい響きが混じり始める。

それ以上に鮮烈なのは、ビデオカメラを向けている男の肩越し、厳めしい男たちの指に大きく割り開かれている秘裂の、艶めいた紅さと淫らなぬめり具合。

(な、なんていやらしい、色艶……ッ！)

羞じらう絢の気持ちを抑え、見てはいけないと思う。

思うがしかし、視線が吸い寄せられて離せない。

陽の光を通した赤ワイン色とでも言えればいいのか、鮮やかなのに深い紅。上下左右から群がり、柔肉の畝を割り開いた男たちの指が蠢くたび、璧の浅い淫唇がぬちゅり、くちゅりと微かな水音を立てて歪む。そのたびに滲んだ愛蜜がいやらしくぬめり光り、薄暗い車内に甘酸っぱい匂いを立ち上らせる。

「まあ、見ての通りだ。親父の借金返済を手伝いながら気持ちよくなれるんで、絢も満更じゃねえってわけ」

耳元で囁かれ、ハッと我に返った美紗は、

「むうう、む、むううっ！」

ガムテープで封じられた口から呻き声を漏らし、羽交い締めにされた身体をしきりに揺すった。絢は確かに感じているかもしれないが、嫌がってもいる。

だいたい、あんな恥ずかしい姿をビデオに撮られ、不特定多数の男に見られるなんて——絶対嫌に決まっている。私だったら恥ずかしすぎて、きっと耐えられない。

（やめて……もうやめてっ！ 絢は私の後輩なのよ、私たち新体操部の次期主将候補なのよ！ アンタたちの玩具じゃない、勝手に変なことしないでっ！）

忘れかけていた義憤が蘇り、身体に力が漲っていく。脇を潜った男の腕は万力のように強いが、膝と足首を縛っているジャージはもう少しで解けそうだ。狭い車内のこと、脚さえ自由になれば男たちを蹴り飛ばせるかもしれない——と。

「絢にこういうことをしているのは仕方のないことなんだが……分かってくれないのか、美沙ちゃん？ しょうがないなあ、口封じするかあ」

背後に貼りついた男が笑い、別の男と目配せした。

それだけで通じたようで、膝に絡んでいたジャージが解かれる。

（な、なにを……あっ!! や……やだ、やめてっ！）

蒼褪めてもがくの、男たちは手慣れており、しかも強引だった。アツと思う間も

あらばこそ、中のショーツごとショートパンツが足首まで引き下ろされてしまう。

「む……う……ッ！」

大切な割れ目を露わにされた恥ずかしさと凌辱の予感に、息が詰まった。

顔が燃え出しそうなくらい熱くなる。

額や腋に羞恥の汗が噴き出し、自由の利かない身体が石のように強張る。

だが、まだ終わっていない。

息もできないほど羞じらっているのに、縛られたままの足首が強い力で持ち上げられた。さらに、縄代わりにされているジャージが、無理矢理押し下げられた頭のうしろに引っ掛けられる。

(う……あっ!! こ、これは……こ、この恰好は……ッ!)

深く身体を折り曲げた、窮屈な姿勢。

窮屈なだけでなく、菱形に開いた脚線美の中に頭を突き出して仰向いた己の秘裂を覗き込んでいるような、屈辱的なポーズだ。健康的に輝く伸びやかな脚を外陰唇に突き出した頭をクリトリスに見立てれば、まるで美紗自身が大きな女性器になってしまったかのような――。

「うはは、さすが新体操部! やっぱ柔らかいなあ!」

「見ろ、絢！ お前の先輩もオマ○コポーズになったぞ！」

「あ……ああ、せ、先輩い……ッ！」

蕩けた頬のまま絢が叫び、ほかの男たちも美紗を振り返る。

（や、やだ……見ないで、見ないでえっ！）

美紗の胸中に響く絶叫は、もちろんだれの耳にも届くことなく、四方八方から不躡な視線が集まる。マシユマロのように柔らかな肉畝を仰向け、躊躇いがちに口を開いた秘処を、いやらしい男たちにも、怯え泣く後輩にも、しっかりと見られてしまう。

「おやあ？ 美沙ちゃん先輩なのに、パイパンかあ。剃っているのかな？」

ビデオカメラを構えた男が笑い、見せびらかすように仰向いた秘処に冷たいレンズを寄せてきた。

見られている、撮られている——きつとネットに流される、世界中の男たちに私の恥ずかしい場所を知られてしまう——！

いまだに毛が生えず、肌理細かな乳白色の柔肌がしつとりと輝いている割れ目は、美紗のコンプレックスの源だ。縮れ毛が一筋でも生えたら自分が自分でなくなるような気がして怖い一方、クラスの中で、あるいは部活仲間の中で、一筋も生えていないのは自分ひとりだけだったりしたら、それはそれで恥ずかしい。

だから部の更衣室でシャワーを浴びるときでもさりげなく隠しているし、キャンプや修学旅行でもだれにも見られないようにしていたのに。

（そ、それを……こんなところで、こんな男たちに……こ、こんな恥ずかしい恰好にさせられて……ッ！）

意識が遠退きそうなくらい羞じらっている美少女を追い詰めるように、いやらしく笑い崩れた男たちが首を伸ばし、肩をぶつけ合いながら、マンガリ返しにされた美紗を無遠慮に覗き込む。

「ふうん？ 剃り跡はないな。正真正銘のパイパンだ！」

「どれどれ……うはっ、本当だ！ スベスベしてら！」

（あっ!! あ……あああっ！ 触るな、触るなあっ！）

カメラのレンズが寄せられるだけでなく、男たちの手が群がってきた。見られるだけでなくも恥ずかしい三角地帯が武骨な指に蹂躪される。無遠慮に撫で回され、荒々しく揉みくちやにされる。

「おお、ぶにぶにマ○コ！ 絢のより土手厚だな」

「ビラビラは……お？ 絢よりちよっと大きいけど、色は綺麗な紅だな！」

マシユマロのように柔らかな肉畝がいくつもの指に引っ掛けられ、止める間もなく

割り開かれた。わずかに潤んだ縁を震わせながら、艶やかに咲きこぼれる粘膜花卉。

(や……やめて、見ないでええっ！)

爆発する羞恥に身を振り、必死に逃れようともがいたのに、いやらしい笑みを浮かべたチンピラたちの顔が仰向いた秘裂を覗き込もうと集まってきた。菱形に開かれた瑞々しい柔肉の狭間、甘酸っぱい粘液をわずかに滲ませて震える肉ピラに、牡たちの好奇の視線が降り注ぐ。

「幅広だけど厚みはない。オナニーもあんまりしていない、処女マ○コだ」

「クリトリスも、絢の最初のころよりずっと小さいな！」

繊細な肉膜が、冷えた空気にくすぐられる。割れ目の縁に痼じこったクリトリスにも熱い眼差しがチクチク刺さる。

「う、む、ソウうつ！」

耳の先まで真っ赤になった美紗はガムテープを貼られた口で狂ったように呻き、撓たわめられた身体を全力で揺すった。新体操部の主将として毎日欠かさず柔軟体操をしていたとはいえ、足首を頭のうしろに引つ掛けられた不自然な姿勢のまま無我夢中で力んだため、背骨や頸椎が鈍い痛みを発して軋む。太腿の筋は限界まで引き伸ばされ、股関節が外れてしまいうだ。

「ダメ、やめて……先輩に非道いこと、しないでえ……ッ！」

「安心しろ。気持ちよくしてやるだけで、非道いことなんてしやしねえって」

「それよりテメエは俺のチンポをしゃぶってる！ 少しでも怠けたら美沙先輩のオマ

○コを犯すからな！」

「うっ!! むぶ、ンえあ……ンお……」

絢の涙声が途切れ、代わりに獣じみた男の唸り声が聞こえ始めた。

(ああ、絢……ッ！)

覆い被さってくる男たちの陰に隠れて見えないが、先ほどの言葉と微かに聞こえるいやらしい水音で、なにをさせられているのかはだいたい分かる。

おそらく口で、穢らわしくおぞましい男根に奉仕させられているのだ。舐めさせられたり唾えさせられたり、しゃぶらされたりしているのだ――。

学園に入学してからずっと部活動に打ち込んでいたため、性に関する美紗の知識は同級生に呆れられるくらい乏しい。それでも、フェラチオとか言う性戯くらいは知っている。もっとも、知識として知っているだけで写真でも動画でも見たことはないし、見たいとも思わない。

男の性器は小便を出す管でもあるわけで、

(き、穢いッ！)

恥ずかしさより先に嫌悪感が溢れ出す。

そんなものにキスしたり、舐めたり、あまつさえしゃぶったり——考えただけでも吐き気がするくらいだ。

そんなおぞましい行為を、美紗のすぐ傍で後輩が強制されている。同じ車内にいるのに、手を伸ばせばきつと触れられるほど近くにいるのに、助けられない。

(ああ……ごめん、絢ッ！ 私はここにいるのに、なにもしてあげられない……)
己の非力さを情けなく思うが、しかし美紗自身も追い詰められているのだ。

「軽くイッてみようか、美紗ちゃん」

「ソウっ!? ソウ、ソウっ！」

柔らかな肉畝が改めて開かれ、小さく波打つ淫唇の縁に硬い指先が添えられた。男の武骨な指先に比べると、美少女の紅く輝く粘膜花弁はいかにも繊細で、乱暴に扱ったらすぐに壊れてしまいそうだ。

しかし、こういうことに慣れているのか、男たちは昂奮しつつも自制的だった。

「オナニーもあんまりしていいのなら、俺たちが教えてやらないといけないな。ほら、ここをこんな風に、ソツとしごくんだ」

表面に浮いた生温かなぬめりを確かめるように、髯の曲面をゆつくりと辿る。

「ん……ッ!? ん……んううっ!」

ツツツと撫でられた肉ビラの縁に淡い電流が湧き起こり、目を丸くしながら髪の毛の生え際に汗の玉を浮かせ、柔らかな頬をホオズキのように赤らめる美紗。

生まれて初めて他人に弄られたせいとか、それともいやらしい視線に晒されて緊張していたためなのか、軽く触れられただけの粘膜花卉がたちまち甘やかに痺れていく。

そんなはずはない、そんなに敏感なわけがない——焦り羞じらっているのに、男の指がわずかに動いただけでこらえがたい快感が湧き起こる。秘裂ばかりか背筋までがゾクゾクツツとなつて腰がくねり、身体の芯が燃えるように熱くなる。

「どうだ? んん? 気持ちイイだろ?」

粘つく声で囁かれ、慌てて首を左右に振るが、自分でも恥ずかしくなるくらい弱々しい動きになってしまった。その間も、秘裂の紅い潤みに触れた指先は敏感な肉膜の縁に羽根のような軽さを与えつつ、ゆつくりゆつくり往復する。焦れつつたくなるような遅さのせいで、淫唇に湧き起こる淡い快感をより鮮明に意識してしまう。

「美紗さんは嘔吐きでちゅねえ。エッチな汁がじゅわじゅわわしてきましたよお」

「ッ!? む、むう、むううっ!」

仰向いた股間にビデオカメラを向けている男に笑われ、全身が燃えるように熱くなつた。身体の芯に羞恥の炎が渦巻いて、胸の鼓動が早まり吐息が乱れる。

（違う、違う違う……感じてなんか、いないっ！）

必死に否定していても、淫らな蜜がじゅわ、じゅわ、と湧き出しているのは自分でも分かる。だから余計に恥ずかしい。

「ハハッ！ マ○コ全体がヒクヒクしてら！」

「オナニー経験もほとんどないクセに、ずいぶん感じ易いんだな！」

笑われるたびに身が竦み、男たちに見つめられている股間に力が入って、桜色に火照る肉畝やあられもなく割り開かれた淫唇が必死に窄もうとする。しかし、どんなに息を詰めて力んでも、窄め続けてはいられない。

（ああ嫌、嫌……見ないで、撮らないでえ……ッ！）

乱れる呼吸に合わせて秘裂が弛み、窄み、愛蜜を滲ませたビラビラが喘ぐようにヒクついた。足首を頭のうしろに引つ掛けられている両脚が恥辱に震え、とめどなく溢れ出る涙が赤らむ頬を濡らす。

さらに――。

「ンッ!? ンう、ンううっ!!」

火照る肉畝が収束した地点、ほっそりとした莢からわずかに顔を覗かせた淫核に、稲光のような快感が弾けた。

男の硬い指先が、女体の中でもっとも敏感な肉豆に、軽く押し当てられたのだ。

「お？ いま美沙ちゃん、ビクツとしたな」

「そりやそうだ、クリクリを弄られたんだからな」

マングリ返しにされた美少女の秘裂を覗き込むチンピラたちの瞳が、妖しい光を強めた。鼻息も荒くなり、仰向いた尻に生温かく湿った微風が吹き寄せてくる。

(やめて、嫌……嫌あつ！)

こんな連中に弄られて気持ちよくなるのは嫌だ、感じていることを悟られたくない。傍には絢もいる、身近な者に恥ずかしい姿を見られたくない——しかし。

「そらそらそら、ここがイイんだろう？」

「ンあつ!? ンあ、ンあああつ！」

快樂神経の塊をトトトトト……つと小刻みに突かれ、弾けるように反り返る美紗。

心地よい波紋が次々と湧き起こり、深く折り曲げられた身体が勝手にくねる。感じはダメ、よがってはダメ——抗う気持ち突き崩され、羞恥も理性も薄れていく。

追い討ちをかけるように、

「ひ……いい、あ……あああつ！」

絢の裏返った声が車内に響いた。

「おい、どうした？ ……ああ、ケツマ○コを使ってるのか」

「絢はウンチの穴が好きだもんなあ」

薄笑いを浮かべた男たちが左右に分かれ、美紗と絢を向き合わせた。

（あ……ああそんな……あ、絢……絢……ッ！）

開けた視界に映る後輩は、太り気味の男に背後から抱かれ、その太腿を跨いでいた。艶めかしく火照った秘裂には指がかかり、肉畝が左右に掻き分けられて、赤く熟した粘膜花弁が羞じらいながら震えている。

その、少し下。

尻の陰に半ばほど隠れてはいるが、見るからに硬そうな剛直に刺し貫かれた絢の尻穴が確かに見える。

あんなに太いモノが、あんなに硬そうなモノが——あんなに根元まで、しっかりと入ってしまっただなんて。

己自身の恥ずかしさを忘れるほどに驚いた美紗は、後輩の尻穴を思わず見つめてしまった。太く硬そうな赤黒い淫棒を咥え込んだ肉穴は、色を失うほどに伸びきってい

るようだ。自分の肛門をあんな風に貫かれたら、と思わず想像してしまい、仰向いた美紗の尻穴がムズムズしてしまう。

「み、見ないでえ……お願い、先輩……見ないでえ……ッ！」

涙声で叫ぶ絢だが、その響きは甘い。

桃色乳首を勃起させた小振りな美乳を見せびらかすように胸を張り、なよやかな腕を上げて背後の男の首にぶら下がっている。細い腰をくねらせ、何度も何度も伸び上がるようにしながら、自らの意思でリズムカルに上下している。

ぶじゅ、ぶじゅ、と小さく聞こえているのは、裏側から押し潰された腔洞が甘酸っぱく香る愛蜜を吹いている音か。

実際、腰に巻きついた男の手によってあられもなく割り開かれた秘裂からは、先ほだから細かく泡だった愛液がとめどなく溢れ出している。近くに寄ってじっくり観察したわけではないが、美紗の物より大人びた粘膜花卉もヒクン、ヒクン、といやらしく喘いでいるのが分かる。

(あ、絢……アンタ、こいつらに……そんなことまでされていたのっ!!)

同性として、先輩として、胸が痛む。

だが一方で、



「ふあ、う……あああ……ああ、うう、あああ……ッ！」

尻穴を貫かれてよがつている後輩の、あられもなく淫らな姿に、若い牝の本能が反応する。アレはひよつとして気持ちイイのか、いったいどんな感覚なのだろうか、といやらしい好奇心が掻き立てられてしまう。

「お？ 美沙ちゃんのおマ○コが急にじゅくじゅくになったぞ！」

「……ッ!!」

嬉しそうなチンピラの声にハッと我に返った美紗は、思わず首を折り曲げ、仰向いている己の秘裂を覗き込んだ。

まさか、そんなはずはない。

絢と私の仲を切り裂くための嘘だ、きつとそうだ、そうに決まっている——しかし。

「ンッ!! ンふ……ンううッ!!」

左右の肉畝を押し潰すようにして硬く太い指たちが秘裂の中へ潜り込んできた途端、美紗の背筋に心地よい荒波が走り抜けた。

芋虫のように伸縮し、粘膜花弁を揉み回す。繊細な肉膜を指の腹でしごき、押し伸ばして、ぬちゅ、くちゅ、にちゅ……と幽かな水音を奏で始める。

（ああ嫌、やだ……か、感じる……感じちゃ、うううッ！ 絢に見られているのに、こ、

こんな連中に見られているのに……ああダメ、腰が……腰があつ！

肛悦に蕩けた絢の、艶めかしく悩ましい姿に共感してしまったのか、ただでさえ敏感な割れ目が肉悦の坩堝と化した。

羞じらう意思に反してじゅわ、じゅわ、と恥ずかしい蜜が滲む。

秘裂を蹂躪する男たちの指に合わせ、小さく撓められた美紗の身体がくねる。

淫唇をしごかれ、揉まれ、弾かれるたび、背筋に熱い快感が走り抜け、息が上擦り理性が薄れて、意識が白く痺れていく。

「ふたりのオマ○コを寄せろ。ふたつ同時に撮るんだ」

「仲のよい先輩後輩みたいだから、一緒にイかせてやろうぜ！」

男たちの笑い声が遠い。

尻穴を貫かれたまま膝裏を掬われて抱き上げられ、小便をさせられる幼女のような恰好で近づけられる絢が、とても愛おしく思える。

（あ、あ、あああ……絢のアソコが、私のアソコに……）

仰向いた秘処に近づけられる、後輩の秘裂。

どちらにも左右から太い指が何本も入り込み、柔肉の畝を大きく割り開いて、紅く潤んだ肉膜を抓んだり押し潰したりしてぬちゅにちゅくちゅと掻き鳴らしている。

「美沙ちゃんは初めてだから、痛いこともしないよ」

「よしよし、いい仔だ。もう泣くな。これからは怖いことじゃなく、気持ちイイことをしてあげるからな。そうだろう、難波くん？」

「ええ、そうですとも」

笑って答えた難波の手に、冷たく光るメスが見えた。

ステージの左右に立つ男たちが縄を掴み、回転を止めると、腰を屈めた難波が美沙の胸の下に潜り込み、亀甲縛りに絞り出された小振りな美乳の先を抓む。

「あ……あっ!! やだ、やめて……ああ駄目ッ！」

難波の意図を察し、掠れた悲鳴を上げる美沙。

だが、助手の男たちに縄を掴まれているため海老反りに吊された身体を揺らすこともできない。駄目、嫌、と思っている間にセーラー服の胸元が引っ張られ、余裕を作られた白い布地に鋭いメスの先端が添えられて――。

刃物で小さな穴を開けた難波は、そこに指を突っ込み、ビリビリと引き裂いて大きく広げた。右も左も広げると、今度はシルクのブラに指をかけ、控え目な丸みの上方に力任せにズラす。

「ああ駄目……いやああっ！」

滑らかなシルクの感触から解放された乳房が、ほどよく冷えた部屋の空気にさわさわ、と撫で回された。冷や汗にしつとりと潤み、羞恥の朱にうつつらと染められた、桜色に輝く膨らみだ。美しい丸みの先端には可憐な乳首が痲り勃ち、客たちのいやらしい視線を惹き寄せてしまう。

（み、見られてる……こんなにたくさんの人たちに、胸を、乳房を……！）

軽やかに揺れるセミロングの黒髪に羞じらい火照る頬を隠して、美沙は恥辱に唇を噛んだ。服の上から縛られ、自由を奪われているだけでも怖いのに、そのうえ隠しておきたい場所を晒けだされてしまうだなんて――。

「あら？ 思ったより小さいオッパイね。詩織しおりといい勝負だわ」

傍らの少女を弄りながら美沙を鑑賞していた女性客が、聞こえよがしに呟いた。小馬鹿にしたような響きを感じ取り、こんな状態になってもカチンときてしてしまう自分を、美沙は不思議に思う。

（小さくて悪かったわね！ 別に見せる物じゃないし、見せたくて見せたわけじゃないし、勝手に見ておいて文句を言うなんて！）

場違いな憤怒に細い肩を震わせる美沙だが、その乳房は普段よりやや大きく見える。セーラー服に開けられた穴の周囲、布越しに柔肌を締め上げている亀甲縛りの荒縄が、

ふたつの膨らみの麓に喰い込んで美しい丸みを強調しているのだ。

「乳房そのものの大きさはともかく、乳首をごろんなさい。名門女学園のお嬢様らしい、実に愛らしい乳首ではありませんか」

身を乗り出したり首を傾げたりして、セーラー服の破れ目からはみ出した小振りな美乳を鑑賞し始める客たち。

「いや、それにしても少々大きすぎませんか？」

「勃起しているんだろう。怖いことが好きな変態お嬢様だな」
やはり笑われた。

思った通り嘲られた。

「ち……違う……違う、違うッ！ 私、変態なんかじゃ、ない……」

割れ目に喰い込む股繩にクリトリスを刺戟されていたせいだ、感じたくなんてないのに感じさせられてしまったせいだ——言いたいことは山ほどあるのに、だれにも聞いてもらえないだろうという絶望が喉を詰まらせる。いや、聞いてもらえないだけならまだしも、言えば言うほど逆手に取り、様々な言葉を使って美沙のプライドを削り取ろうとするだろう。

そう考え、震える唇を噛んでいると、

「乳首がそんなに大きくなってきているなら、アソコもぐちよぐちよなんじゃないか？」

「難波くん、ちよつと開いてみせてくれ」

「いえ、それよりもこうしましょう」

客のリクエストを笑顔でいなした難波が、宙に浮いた美沙の身体を水平に回した。

「や、やめて、嫌……もう嫌っ！ これ以上は、もう……ッ！」

必死に閉じようとした太腿が難波の手に押さえられ、秘処を守る純白のショーツにメスの先端が近づけられる。

小さく抓まれ、切り取られたのは、二本の縄が合流してY字を作っている部分のわずかに上。親指の先端で抑えたら簡単に隠せるほど小さなショーツの穴の奥に、必死に窄まっている鳶色の肛門が見え隠れする。

さらに――。

(あ……ッ!?)

快樂神経の塊に冷たい微風を感じ、耳の先まで真っ赤になる美沙。股間側、二本纏まった股紐の間の薄布にもメスで小さな穴を開けられ、恥ずかしい割れ目の端に痲つた敏感な肉豆がはみ出してしまったのだ。

ズラされていた股縄が戻され、硬い結び目が直接淫核に当たる。

「ひ……うう……ッ!？」

ショーツ越しのときとは比べものにならないほど鮮烈な感覚が弾け、美沙はビクビクッと震えてしまった。

痛い——のに、気持ちイイ。

縫り合わされた繊維の一筋一筋が、敏感な肉豆の真っ赤な粘膜に感じられる。ところどころに生えた細かなケバがチクチク刺さり、餅米くらいの大きさに勃起したクリトリス全体が指で揉み潰したくなるほどむず痒くなる。

準備が済んだのか、メスを片づけた難波が背を伸ばした。

「胸とクリトリス、そして尻穴に触れるようにしました。弄りたい方はお並びください。ただし、有料です。参加希望者は一本をお支払いください」

「がめついチンピラめ! このうえさらに我々から金を巻き上げる気か!」

客のだれかが非難の声を上げたが、怒っているのではなかった。むしろ逆に悦んでいる。いやらしい笑みを深めた男たちが次々に席を立ち、難波の前に並び始めた。

(やだ、嘘……こ、こんなの、聞いてないッ!)

己の身体を勝手に売られるという恥辱も辛いが、見知らぬ男たちに身体を弄り回される恐怖のほうが遥かに大きい。

客は難波のようなヤクザ者ではないから、ひとりひとは怖そうでない。だが、ニヤニヤした男たちが近づいてくると、振り返った背筋に冷たい汗が噴き出した。

——怖い。

チンピラたちに捕まって白いバンに連れ込まれたときより、難波に催眠薬を飲まされてヤクザ者に弄り回されたときより、さらに怖い。

難波に代表される、暴力行為のプロフェッショナルたちの怖さは、喻えるなら引き金の軽い拳銃のようなものだ。下手に扱うと暴発する危険性はあるが、一方でそれなりにコントロールされているという安心感もある。

だが、この男たちは——下劣な欲望を剥き出しにて、吊られた美沙の周囲に群がり始めた素人たちは——。

「ククク……いい顔だ。絢ちゃんもそうだったが、新体操部というのは身体が柔らかい分、耐性があるのだな」

蒼褪めた美沙の顔を間近から覗き込んで、客のひとりが笑う。別の客がフックにかけられた縄を掴んだのか、緩やかな回転が止まって身体が揺れる。

「くっ!! あ……あああ……」

秘裂に喰い込む荒縄が、一段と強く意識された。

ひとり、またひとりと客が近づくとつれ、凌辱の予感が高まって下腹が冷える。まだ破られていないシルクの股布の下、しっとり潤んだ繊細な粘膜炎が、チンピラやヤクザたちに弄り回されたときの快感を思い出してじゅくん、と疼く。

「並みの少女なら、海老反りの姿勢が苦しくてそろそろ気絶するころなんだが」

「どんな美少女でも、悲鳴が聞けないのではつまらないですからなあ」

いやらしい笑みが増えるにつれ、美沙の恐怖は倍加した。

喉が引き攣り、掠れた嗚咽が漏れる。

亀甲縛りによって強調された小振りな美乳の奥で、心臓が早鐘を打ち、怯え強張った全身に熱い血潮が駆け巡る。

「や……やめて……触らないでッ！」

「そういうわけにはいかない。金を払ったんだからな」

薄笑いを浮かべた男たちが競うように手を伸ばし、美沙の身体を掴み始めた。折り曲げられた膝が撫でられ、背に向かって引つ張られている脛に頬擦りされる。ハの字に開いた太腿に汗ばんだ掌が添えられ、瑞々しい柔肌の下で緊張しているしなやかな筋肉を確かめるように、さわ、さわ、と股間に向けて何度も何度も撫で上げられる。

「う、うう……ふあつ!! あ……ッ！」

下を向いた小振りな乳房が、大きな掌に受け止められた。途端、乳肌に湧き起こる淡い快感。

(い……いや、いやっ！ こんな非道い人たちに、こんな、こんな……っ！)

欲望を剥き出しにした男たちも怖いし嫌だが、それ以上に嫌なのは己の身体だ。気持ち悪いはず、おぞましいはずなのに、吊られた心細さのせいか、男の厚い掌の感触を身体が悦んでしまう。

そんな少女の気持ちを知ってか知らずか、

「これはこれは……絢に負けず劣らず、いい手触りだ」

破かれたセーラー服からこぼれ出た控え目な乳房を弄びながら、男のひとりがいやらしい笑みを深めた。

「若い牝に特有の、この吸いつくようなこの感触……たまりませんなあ」

輝くほどに瑞々しい乳肌を、じつとり汗ばんだ掌で握るように撫で回す。感じ易い乳首には直接は触れず、その周囲の、艶めかしいピンク色に染まった乳暈の縁を、硬い指先でツツ、ツツ、と辿るように撫でる。

「や、あ……め、てえっ！ うう、ああ……も、揉まない、でえっ！」

羞じらって叫べば叫ぶほど、男たちの手は増え、乳や尻だけでなく二の腕や太腿、

さらには脇腹まで硬い指先で揉みまくられた。

芋虫のように蠢く男の指が尻房を押し歪め、ショーツに開けられた小さな穴へ近づいてくる。胸に群がった手はどうとう勃起乳首を探り当て、

「くっ!! あ……くううっ!!」

軽く抓られたり、乳頭を押さえられたり、クニクニと折り曲げられたり。

(やだ、なぜ? どうして? どうしてこんな……気持ちイイのっ!!)

乳首はもともと敏感だが、それにしてもは鮮烈すぎる。

紅く可憐な勃起乳首を弄られるたび、胸先に稲光のような快感が閃いた。それはたちまち熱く甘い痺れに代わり、乳腺を伝って小振りな美乳全体に行き渡ってしまう。

「ふ……く、ううんッ!」

武骨な指先に捏ね潰された乳首が鋭い淫悦を発するたび、海老反りに吊られた細い身体をくねらせ、セミロングの黒髪を踊るように揺らす美沙。新体操部で鍛えられた華奢なウエストがいやらしく微笑む男たちの前で右へ左へくねり躍り、さらなる笑い声を引き出してしまふ。

「ほほう、可愛い声が出たな。どうやら美沙ちゃんは感じ易いらしい」

「ち、違……んあっ!! く……あああっ!!」

秘裂に喰い込んだ股縄に指を引つ掛けられ、軽く引かれた。クリトリスに直に触れた結び目がわずかに上下し、乳首のそれよりいっそう強烈な快美感が炸裂する。

(嫌だ、嫌だ……嫌、なの……にいつ！)

いくつもの指に弄り回されている乳首と淫核の間に、心地よい電流が往復し始めた。そのたびに海老反りを強制された身体がビクン、ビクン、と震え、

「ハハッ！ ずいぶん敏感だな」

「ほらほら、いい仔だ、泣くんじゃない。気持ちイイことをいっばいして、痛いのも怖いのも忘れさせてやるからな！」

いやらしい男たちを悦ばせてしまう。

海老反りに縛られて自由を奪われているせいか、宙に吊り上げられている恐怖のせいか、あるいははたくさんの男女にいやらしい目つきで見つめられているせいか、いつもより神経が過敏だ。

剥き出しにされた小振りな美乳のしっとり輝く白い柔肌が、武骨な指に歪められるたび牡たちの鼻息が荒くなる。痛いほどに痲り勃つた乳首を弄られ、弾ける快感にセミロングの黒髪を揺らして喘ぎ悶えれば、サディスティックに微笑んだ女性客が頬を嬉しそうに輝かせる。

それだけでも悔しいのに、さらに——いまだにショーツに包まれた小振りの美尻に手が載せられ、白い薄布に開けられた小さな穴の中に、芋虫のように伸縮するいやらしい指が潜り込んできた。

「や……やめて、放して……あッ！　そ、そこ駄目……触らない、でえっ！」

「んん？　ここは駄目か？」

「ひあ……っ!!　だ、駄目……そこ駄目、駄目……き、穢い……ッ！」

叫ぶ声は無視され、仰向いた肛門に指の腹が添えられる。

（なぜ？　どうしてっ!!　どうしてみんな、お尻の穴に興味があるのっ!!）

チンピラたちにもヤクザたちにも弄られたし、絢も肛門を犯されていた。穢いとは思わないのか？　それとも、穢い場所だから触りたいのか？

周りの鬼畜たちに対する反感からそんなことを考えたが、美沙にも答は薄々分かっていた。そこに触れられると、どうしても悲鳴が漏れてしまうからだ。

普段の生活ではほとんど意識することのない、穢れの肉穴。

どうして忘れているかと言えば、排泄行為以外では使い道がないから。

そしてその排泄行為は、幼いころに恥ずかしいこと穢いこといけないことの筆頭として、最初に教え込まれる行為だ。股間の割れ目や胸のふたつの膨らみを、恥ずかしい



と思う感情より、ずっとずっと根が深い。

ゆえに肛門は、そこにあると意識しただけで恥ずかしくなる。必要のないとき以外は忘れていないと、普段の生活を行えなくなる。

そんな場所を執拗に弄られ、無理矢理意識させられたら、吊られた身体を必死に揺すり、やめて、嫌、と叫ばずにはいられない。幼児退行したような過敏な反応が面白いから、やたらと弄られてしまうのだ。

もつとも、それが分かってもどうしようもない。

荒縄で緊縛され、宙に吊り上げられているから、逃げることを避けることはもちろん、手で庇うことすらできない。

「く、う……ううっ！」

恥辱に頬を赤らめ、唇を噛んで、小さく呻く美沙。

下腹に力を込めて強く強く締めて拒否の意思を示しても、男たちは諦めない。ばかりか、むしろ逆に躍りになって、周囲の肌より一段濃くなった菊膜をキュッキュ、キュッキュ、と磨くように揉み解す。

「うーん、ずいぶん硬いなあ。これではオチンチンを挿入れられないぞ。さあ、ゆっくり息を吐いて。お尻の穴を弛めるんだ」

「ゆ、弛め……ませんっ！ ぜ、絶対に……ンくっ!! う、ああ……ッ！」

ハの字に開いた太腿が震え出すほど力を込め、必死に尻穴を締めていると、仰向いた尻にいくつもの手が群がってきた。ショーツの真ん中に小さく開けられた穴へ、右からも左からも新たな指が這い込んでくる。上や下からも指が挿し込まれ、それぞれが別々に蠢きながら、緊張した括約筋を揉み解し始める。

「無駄な抵抗はやめなさい。キミがどんなに嫌がっていても、我々はもう金を払っているんだからな。この穴にペニスをねじ込むまで終われないんだよ」

「痛いのは嫌だろう？ 悪いことは言わない、さあ、力を抜きなさい」

「え……？ い、挿入れるのッ!? やだ、嘘……話が違うッ！」

焦った美沙が掠れ声で叫ぶと、真正面から難波に、怪訝そうな顔で覗き込まれた。

「お前は絢の代わりだっって言っただろ？ だったら当然、ケツの穴でするに決まっているじゃないか」

「そ、そんな……ああ嫌、お尻は嫌……そ、そんなことだと知っていたら、絶対、絶対……断つたのにいッ！」

身体を吊り上げている縄が軋むほど激しく身を揺らし、セミロングの黒髪を艶やかに振り乱す美沙。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>